

巻頭言

新年のご挨拶

—若手研究者・技術者の育成—

和田 隆博

龍谷大学 理工学部 教授

連絡先 wada@rins.ryukoku.ac.jp



みなさん、明けましておめでとうございます。NCF 会長を務めさせていただいています和田です。昨年末に開催した NCF 第 210 回特別研究会—技術・情報の交流と創造展—で元 NCF 副会長の南 努 先生に「私の研究履歴書～ガラス半導体、超イオン伝導ガラスからゾルーゲルまで～」という題目で若手研究者・技術者に向けたお話をさせていただきました。先生の 50 年にわたる研究経験に基づいたお話で、示唆に富んでおり感銘を受けました。

私も約 15 年前に企業から大学に移り、毎年研究室に配属される約 10 名の学生さんに卒業研究の指導を行ってきました。その経験から、「啐啄同時」の重要性を感じるこの頃です。「啐啄同時」とは禅の言葉で、啐とは卵からヒナ鳥が孵るとき、内側からヒナ鳥が殻をコツコツとつつくことを言い、また啄とは親鳥が外側から卵の殻をコツコツとつつくことを言います。この両者の行動が一致したとき、卵の殻が割れて新しい生命が誕生します。この「ヒナ鳥と親鳥」の関係が「弟子と師匠」になります。啐は学ぼうとする者の意欲を、啄は教える者の行動をあらわします。教育では学ぶものの強い意欲と教える側の適切な指導力の両方が不可欠です。最近、マスコミ等で教える側の指導力が問題視され、欧米の教育を模倣し、インターネットを活用した授業を中心に知識を豊富に与える授業技術が取り上げられているのを、しばしば目や耳にすることがあります。しかし私は今こそ「啐啄同時」が教育の基本的考え方として見直されるべきであり、日本の理工系大学で行われている卒業研究をもっと大切に育てる必要があると思っています。

社会で必要なのは、知識を活用して、自ら創意工夫し、業務を遂行する能力で、単なる知識ではありません。その能力を得るためには、各人が主体的に未知の課題に対峙する必要があります。研究室でもっとも指導に苦勞するのがこの未知の課題に立ち向かうチャレンジ精神の育成です。一人一人の学生が、各自の研究課題に真剣に向かい、先輩から仕事のやり方を教えてもらいながら、研究を遂行するようになることです。少数の学生は、研究室に配属される前からそのような能力を身につけているように思います。研究室発足当初の学生の話です。当時、セラミックスの作製の指導を行ってもらっていた元松下電器の松尾嘉浩氏から「今年は、変わった学生がいる」と報告を受けました。その学生は、研究室に来てから松尾さんに付き切り、セラミックス作製のやり方を見て、それを見習って自分の課題のセラミックスを作製しているとのことでした。見習わなくても良いところまでまねをするので、そこはまねなくても良いと、逆に注意しているとのことでした。彼の父親は、京都で着物の「紋」を書く仕事をしており、伝統工芸の世界で、師匠のやり方を盗むことはもっとも重要な事であり、その重要性を、子供のころから親を見て知っていたのだとわかり、まさに教育の根底をみたような気がしました。

「やらされている」から、自ら積極的に「やる」への、心の転換の指導は、これからも私の課題です。同じような若手技術者・研究者への指導は、皆様の職場でも日々行われているのではないのでしょうか。

最後にもう一つ、心に残っている話を紹介します。松下電器の新入社員の頃、当時の材料研究所長、早

川茂氏が朝会の折に江戸時代の佐藤 一斎の言葉として「一燈を掲げて暗夜を行く。暗夜を憂うこと勿れ。只だ一燈を頼め。」を紹介されました。私は初めてこれを聞いたときに、佐藤 一斎は剣豪で、一燈を一刀と思いました。所長は翌週、あまりにも誤解が多いとのことで、「一つの灯りを掲げて暗い夜道を行くとき、暗夜を嘆いても、暗夜そのものを変えることはできない。我々にできるのは、自分が手にしている一灯（提灯）を頼りにして、ひたすら前に進むことだけだ」と、解説をされました。たまたま職場の朝会で聞いた言葉ですが、今も私の大切な判断の指針として心に残っています。皆様の職場も、仕事の間であるとともに仕事を通じた人間教育の間であると思います。皆様の会社の良き伝統を、職場の若い人たちに引き継いでいただきたいと思います。そして、これからの日本企業を取り巻く情勢は暗夜のように見通せない状況ですが、よき伝統（一燈）を頼りに、ベテランと若手が力を合わせて、ひたすら前に進んでいただきたいと思います。微力ですが、NCFはそんな皆様方の手助けをすべく尽力をしたいと思っています。本年も、よろしく御願います。